

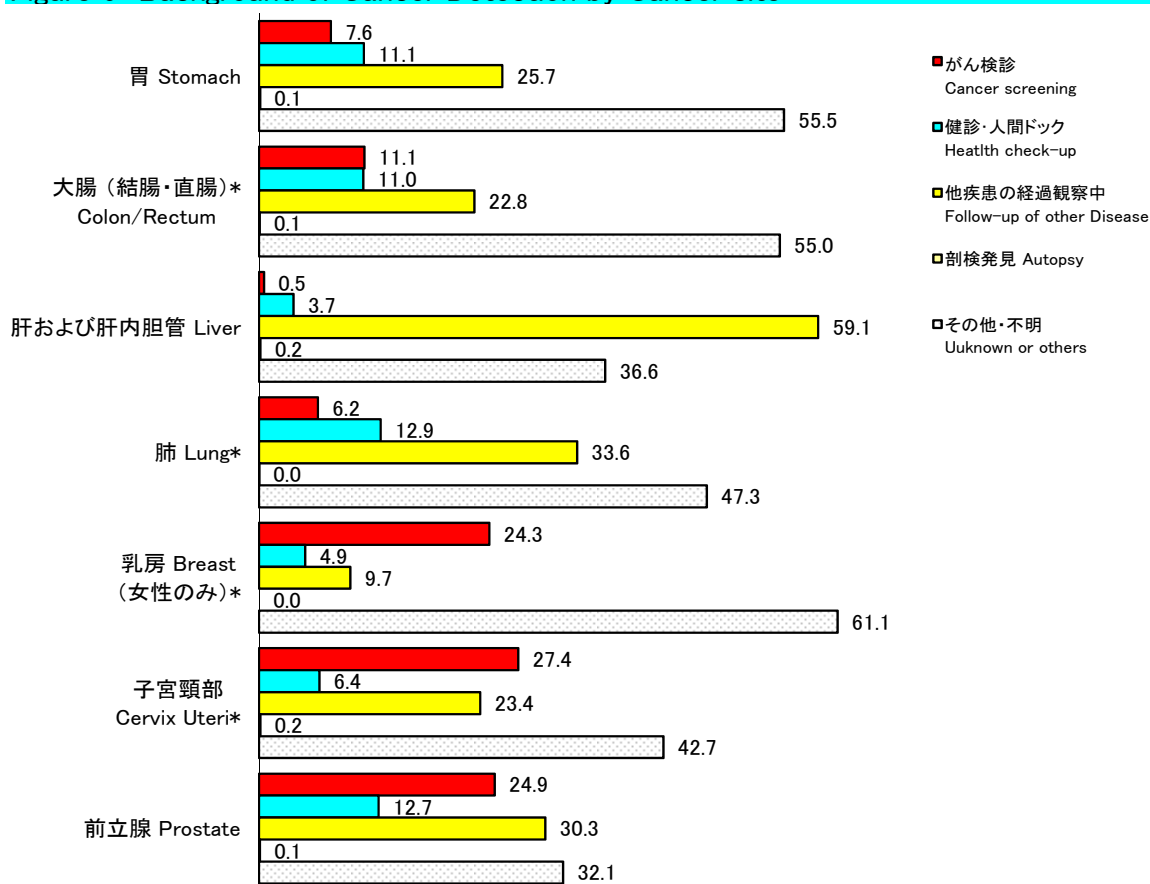
発見経緯 Background of Cancer Detection

一般に住民検診が実施されている胃、大腸、肺、乳房、子宮頸部、前立腺において、がん検診もしくは健康診断・人間ドックが発見の契機となった症例の割合は合計すると、胃18.7%、大腸 22.1%、肺19.1%、乳房29.2%、子宮頸部33.8%、前立腺37.6%であった。子宮頸部においては、がん検診が発見の契機であった症例の割合は27.4%と、他のがんと比べて最も高く、前立腺、乳房も約25%と高い。

その他・不明には何らかの症状による医療機関受診時の発見が多数含まれる。その他・不明の割合が減少し、検診等で発見された割合の増加が望まれる。

肝・肝内胆管において、他疾患の経過観察中の発見が多いのは、肝炎や肝硬変治療中の発見によると考えられる。前立腺において、健診・人間ドックでの発見が多いのは、前立腺肥大やPSA高値の症例の発見によると考えられる(図6)。

図6 部位別発見経緯(%):対象はDCOを除く届出患者 (表4-A、Bから作成)
Figure 6 Background of Cancer Detection by Cancer site

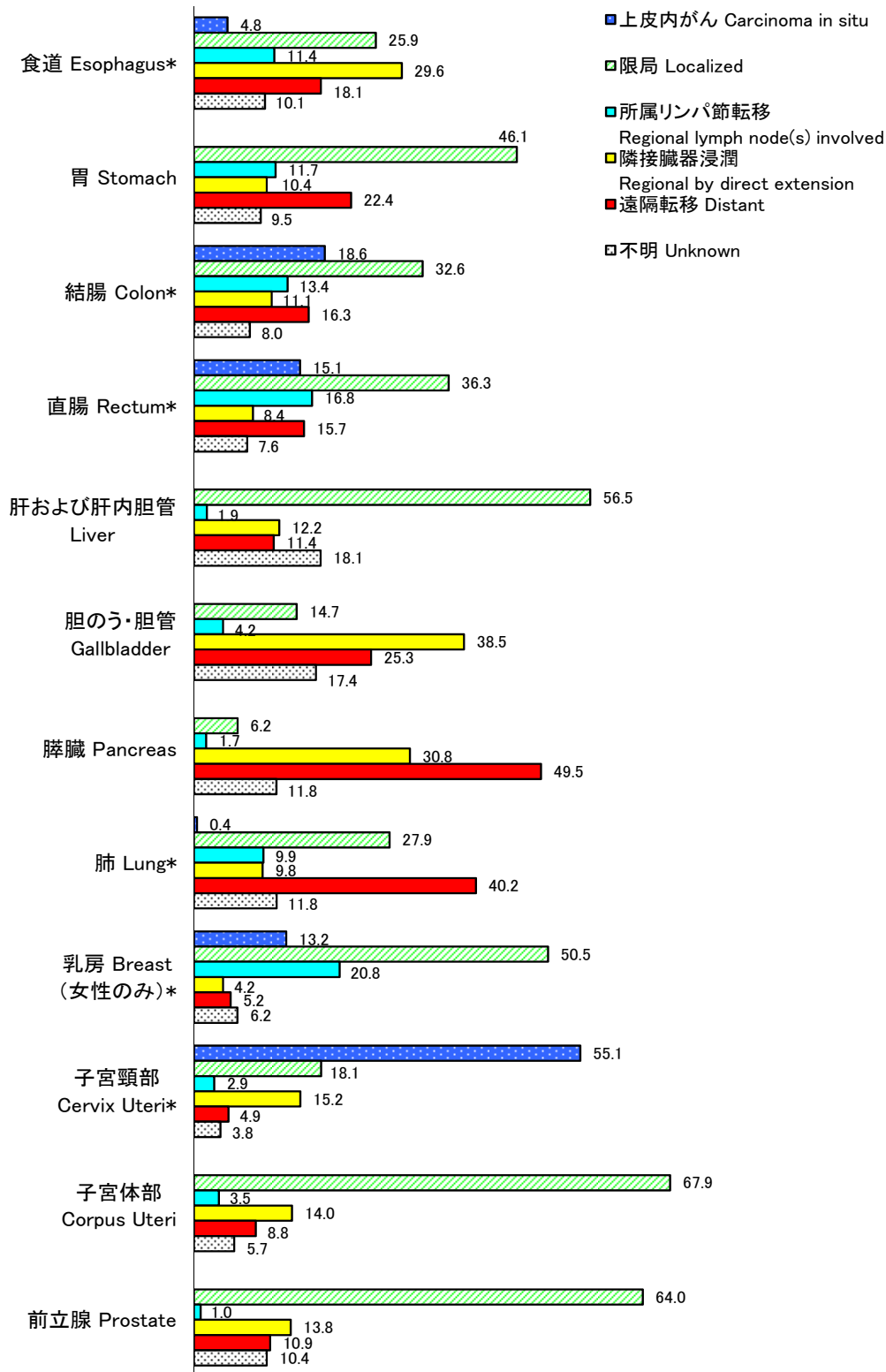


* 上皮内がんを含む

病期 Clinical Extent of Disease

胃、大腸、乳房、子宮頸部、前立腺など、一般的にがん検診が実施されている部位においては、発見時の病期が上皮内がん、限局がんの割合が高い。一方、肺は、がん検診が実施されている部位にもかかわらず、発見時に遠隔転移があった割合が高い。また、膵臓など腫瘍が比較的大きくなるまで自覚症状の出にくい部位では、発見時に遠隔転移があった割合が高い(図7)。

図7 部位別発見時の病期(%) :対象はDCOを除く届出患者 (表5-A、Bから作成)
 Figure 7 Distribution of Clinical Extent for cases of different sites

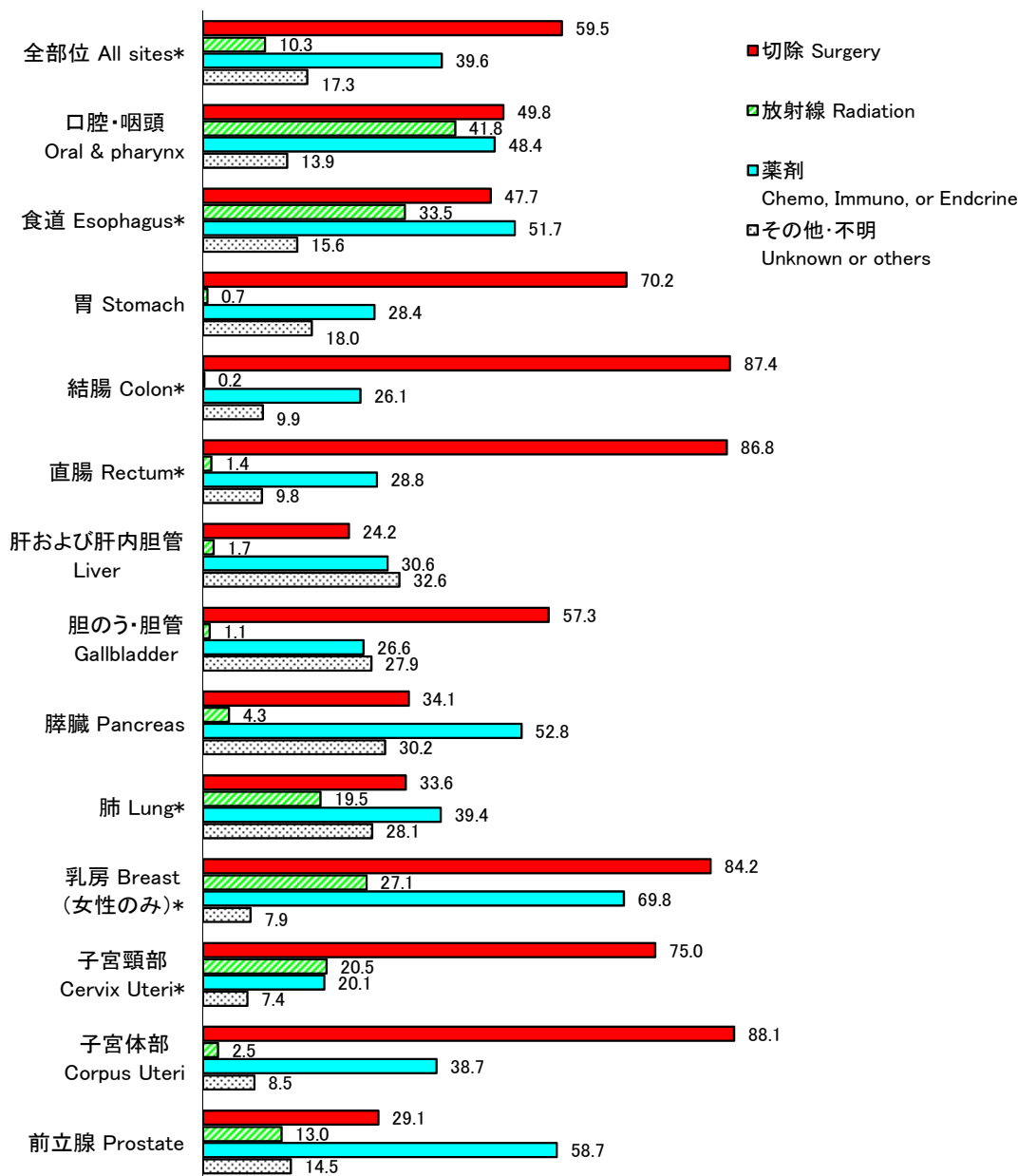


* 上皮内がんを含む
 胃の限局には、mがんまでを指す
 結腸・直腸の上皮内は、mがんまでを指す
 子宮頸部の上皮内は、CIN3を含む

初回治療の方法 First Course of Therapy

胃・結腸・直腸などの消化管、乳房、子宮頸・体部などのがんでは、手術などの外科的治療の割合が高い。口腔・咽頭、食道、乳房、前立腺では、薬剤や放射線による治療も比較的多く行われている。食道、肝および肝内胆管、肺、膵臓では、手術に比べ薬剤(化学療法)が多く行われている。前立腺の薬剤による治療は、ほとんど内分泌治療と考えられる(図8)。

図8 初回治療の方法(%) :対象はDCOを除く届出患者 (表6-A、Bから作成)
Figure 8 First Course of Therapy



* 上皮内がんを含む

切除には、外科的、体腔鏡的、内視鏡的手術を含む
薬剤には、化学療法、免疫療法、内分泌療法を含む